古代ギリシアの巡礼地歴訪

山　川　廣　司

はじめに

科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）「四国遍路と世界の巡礼、その歴史的諸相の解明と国際比較」の交付を受け、四国遍路との比較の視点から、本年度は欧米関係の研究分担者が現地調査に出かけることになった。

西洋史専攻である筆者は2008年の年明け早々の１月５～13日まで古代ギリシアの巡礼地調査に出かけた。日程は以下の通りである。

ギリシア巡礼路現地調査

日次	月　日	都　市　名	時刻	交通機関	摘　　要
①	１月５日 (日)曜日	松山空港発 関西空港着 関西空港発 フランクフルト フランクフルト アテネ	7:55 8:40 10:40 15:10 18:00 22:05	NH1748便 LH741便 LH5914便	エフテリオス・ヴェニゼロス空港（エアポートバス）　シンタグマ広場　ホテル着
②	１月６日 (月)曜日	現地調査		アテネ 滞在	ディオニュソス劇場、エウメネス２世のストア、オデオン、アクロポリス遺跡（プロピュライア、アルテミス・ブラウロニア聖域、パルテノン、旧アテナ神殿、エレクテイオン、クレプシュドラの泉屋）、パン・アテナイア大通り、アゴラ（アゴラ博物館、アグリッパのオデオン、ヘファイステイオン、旧・新ブーレウテリオン、トロス、ゼウスのストア、12神の祭壇）、モナスティラキ地区、ローマンアゴラ、プラカ地区、ミトロポレオス大聖堂、シンタグマ広場、国会議事堂　　アテネ泊
③	１月７日 (火)曜日	現地調査		レンタカー借り上げ	アテネ発、ペラコラのヘライオン（ヘラの神域）、コリント地峡、古代ディオルゴス、イストミア遺跡、ケンクレイア、旧エピダウロス（野外劇場跡）、ナフプリオン　　ナフプリオン泊
④	１月８日 (水)曜日	現地調査		レンタカー借り上げ	ナフプリオン発、エピダウロス博物館、聖域エピダウロス遺跡（野外大劇場、カタゴゲイン（宿泊施設）、ギリシア時代の浴場、オデオン、ギュムナジオン、スタディオン、ローマ時代の浴場、北の柱廊、プロピュライア、アスクレピオス神殿、トロス、アバトン）、ティリンス、ネメア遺跡、コリント博物館、コリント遺跡（オデオン、グラウケの泉、アポロン神殿、アゴラ、南ストア、神殿Ｃ、神殿Ｅ）、アクロコリント、オリンピア　　オリンピア泊
⑤	１月９日 (木)曜日	現地調査		レンタカー借り上げ	オリンピア博物館、オリンピア遺跡（ローマ時代の浴場、ギュムナジオン、プリュタネイオン、パラエストラ、テオコレイオン（神官宿舎）、レオニデイオン（宿泊施設）、ブーレウテリオン、ゼウス神殿、ネロの凱旋門、スタジアム、宝物庫、給水施設、メトローン、ヘラ神殿、フィリペイオン）、ピュロス・ネストールの王宮遺跡、トロス墓、コーラ博物館、パトラ　　パトラ泊
⑥	１月10日 (金)曜日	現地調査		レンタカー借り上げ	パトラ考古学博物館、リオ＝アンティリオ橋、デルフィ考古学博物館、デルフィ聖域遺跡（ローマンアゴラ、聖道、アルゴス王族の記念物基礎、シュキオン人の宝庫、シフノス人の宝庫、アテナイ人の宝庫、ブーレウテリオン、野外劇場、スタディオン、ストア）、カスタリアの泉、ギュムナジオン、アテナ・プロナイアの神域）、リヴァディア、アテネ　　アテネ泊
⑦	１月11日 (土)曜日	現地調査		アテネ 滞在	シンタグマ広場、貨幣博物館、アカデミア、アテネ大学、国立図書館、オモニア広場、アテネ国立考古学博物館（コレクション―新石器・キュクラデス、ミュケナイ期出土品、アルカイック期・古典期・ヘレニズム期彫刻、ブロンズ製品、アクロティリ遺跡出土品、陶器類）、アテネ中央市場（現代のアゴラ）、モナスティラキ広場、プラカ地区、ミトロポレオス大聖堂、ハドリアヌス門、オリンペイオン（ゼウス神殿）　　アテネ泊
⑧	１月12日 (日)曜日	アテネ ミュンヘン ミュンヘン	12:35 14:10 15:25	LH3389便 LH714便	ホテルチェックアウト　シンタグマ広場（エアポートバス）　エフテリオス・ヴェニゼロス空港
⑨	１月13日 (月)曜日	成田空港着 羽田空港発 松山空港着	11:05 17:20 18:50	NH595便	

2001年５月以来久し振りに訪れたギリシアであるが、今回の現地調査の目的は、(1)前回訪問時に閉館時間の関係で十分に調査できなかった聖域エピダウロス遺跡を再訪し、アスクレピオスに関連する聖域を詳しく調査する、(2)ミュケナイ時代以前の民衆信仰に関わる土偶などの出土品、ミュケナイ時代の王宮の聖所に関わる出土品、暗黒時代以降の半神祭祀に関わる遺物など、主として博物館に収蔵・展示されている遺物資料の収集を図る、(3)古代ギリシの四大民族祭典の地として、ギリシア各地から多くの巡礼者を集めたオリンピア、デルフィの遺跡と博物館、また今回は当初の予定にはなかったが、古山夕城氏の配慮で実現したネメアの遺跡と博物館（イストミア遺跡は現在閉鎖中のため外部からの見学）を調査し、できるだけ多くの文献資料と写真資料を収集することであった。

幸いなことに今は観光シーズン・オフで、地方の遺跡はほとんど見学者はおらず、監視員の方が多いくらいで、観光客などの人の流れを気にすることなく、ゆっくり自分のペースで観て回ることができたこと、また丁度明治大学の古山夕城氏が在外研究でギリシアに滞在中であったので、レンタカーを借り上げ、古山氏に運転をお願いし、時間的に非常に効率よく、予定していた以上の遺跡を巡ることができた。周知のようにギリシアは鉄道網があまり発達しておらず、遺跡巡りは車やバスを利用することになる。観光シーズンになるとアテネからかなりの本数のバスが各地の遺跡に運行しているが、シーズン・オフになると極端に本数が少なくなり、かつ午後３時には博物館や遺跡は閉鎖になってしまうので、いくつもの遺跡を調査することはきわめて困難である。またギリシアは右側通行で、左側通行に慣れた我々の運転は危険であるが、古山氏は以前ギリシアに住んでおられた経験もあり、頻繁にギリシアを訪れて遺跡調査をされており、私は助手席で安心してギリシアの景観などの写真を撮ることができた。バスの時間を気にすることなく、ゆっくりと遺跡を観て巡ることができ、貴重な資料として4500枚を越える写真を撮影することができ、また2001年の５月にギリシアで巡った遺跡のいくつかも再訪することができ、充実した調査旅行をすることができた。古山夕城氏のご配慮とご好意に深謝したい。

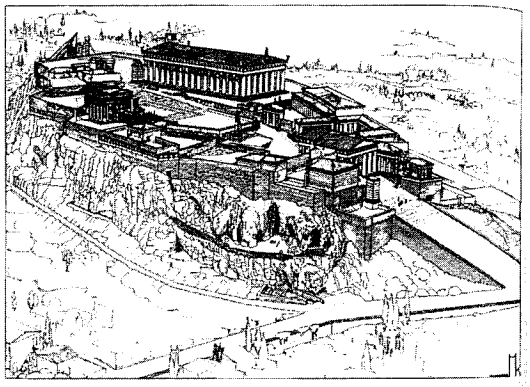
第１日目

改めてルートを辿りながら、旅行を振り返りたい。１月５日の朝、関空からフランクフルト経由で夜10時過ぎにアテネに到着、リムジンバスで市の中心シンタグマ広場まで行き（約１時間、3.2ユーロ）、そこからスーツケースを引いて徒歩でホテルに着き、チェックインしたのが午後11時過ぎで、７時間の時差を含めて長い一日だった。

第２日目

６日は主顕現祭（THEOFANIA）の祝日でかつ日曜日だったので、アクロポリスなどの遺跡や博物館は無料で開放（通常は共通入場料12ユーロ）されており、幸先のよいスタートとなった。この日は古山氏と午前９時にホテルのロビーで待ち合わせ、一緒にプラカ地区を通ってアクロポリス遺跡へ直行した。

まずディオニュソス神の神域に隣接して、大ディオニュシア祭が挙行されたディオニュソス劇場に入場する。それは紀元前６世紀に建設され、その後も改築と再建が繰り返されたが、大理石の貴賓席、オルケストラなどが残っている。約17,000人を収容し、古典期にはギリシア悲劇、喜劇が上演されたが、現在は遺跡として公開されている。



53. Reconstruction of the Athenian Acropolis. Drawing by M. Korres, used by permission.

(1) アクロポリス復元図
出典：J.M.Hurwit, p.153

劇場に隣接して医神アスクレピオスの聖域アスクレピエイオンがある。ペロポネソス戦争が始まって間もなく、アテナイに疫病が流行したため、紀元前421年にエピダウロスから勧請された施設で、コス、ペルガモン、ローマと並んでアス

クレピオスの聖域として有名で、現在はアスクレピオス神殿の礎石が残っているが、遺跡そのものには入れず、むしろアクロポリスの丘の断崖の上から南麓側を見下ろして遺構の確認ができる。

ペルガモン王エウメネス２世が寄贈した列柱館沿いに進むと、ローマ時代のギリシア人で金持ちのヘロディス・アッティコスが寄贈したオデオン（音楽堂）がある。右手を登るといよいよ聖域アクロポリス遺跡に到着する(1)。

プロピュライア（玄関）を通り過ぎると急に視界が開け、右手にアテナイ・ポリスの守護神アテナ女神を祀ったパルテノン神殿の偉容が現れる(2)。現在目にすることができるパルテノンは、ペルシア戦争が終結した後、アテナイの黄金時代を現出させたペリクレスの指導の下、フィディアスが総監督となり、ペンテリコン山の大理石をふんだんに使用して完成されたドーリス式の最高傑作の神殿であるが、エレクテイオンとの間にペルシア戦争で工事が中断し、ペルシア軍によって破壊された旧アテナ神殿の遺構もある。その列柱の一部はアクロポリス北側の城壁に組み込まれ、アゴラからアクロポリスを望む時、常に目にすることでアテナイ人はペルシアへの怒りを忘れず臥薪嘗胆したという(3)。その他６体の乙女像カリュアティデスで有名な複合神殿エレクテイオンもあるが、これらについては別の機会に報告した拙稿を参照していただきたい*。

アクロポリスからアゴラに通じる大通りがパン・アテナイア大通りで、アゴラを横切りケラメイコス地区のディピュロン門までつながっている。守護神アテナ女神の誕生を祝うパン・アテナイア祭の行列の模様はパルテノンのフリーズで有名であるが、今でもパン・アテナイア大通りの石畳の一部が残っている(4)。アクロポリスから大通りに沿って坂道を下っていくとアゴラ遺跡に入る。

周知のように、アゴラ（広場）は古代アテナイ人にとっては、政治・経済・裁判などの諸機関、市場、仕事場や商店などの商業施設、劇場、公共浴場や体育所などの娯楽施設が集中しており、時代とともに構成は変化するものの、常に人々の生活の中心であった(5)。まずアッタロスのストアを復元したアゴラ博物館でアゴラから発掘された展示品の資料収集を行ない、次いでアゴラ遺跡内の建物群の配置などを確認した。プラカ地区にあるスブラキの名店タナシスで遅い昼食を堪能したあと、今度は１人で、ハドリアヌスの図書館や風の塔などがあるローマ時代のアゴラや下町プラカ地区を歩き回

(2) パルテノン神殿

(3) 旧アテネ神殿の柱を利用した城壁

(4) パン・アテナイア大通り

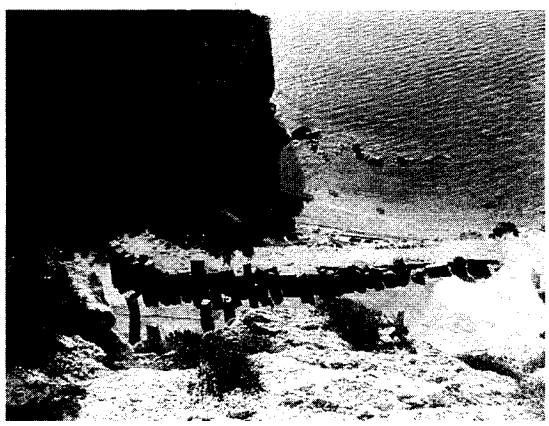
(5) アゴラ：左手にアッタロスのストア、右手にアクロポリスを臨む

り、その日の最後に、クリスマス最後の催しを楽しむ人々で溢れているシンタグマ広場まで散策した。

第３日目

７日は８時半に古山氏とホテルのロビーで待ち合わせ、９時にレンタカー借り上げの手続きを済ませ、丁度年末からギリシアに来ておられた古山氏の奥様由紀さんも一緒に調査に参加してもらえるとのことで合流し、３人で巡礼地関連遺跡を巡る小旅行に出かけた。

まず最初にコリント湾に面するペラコラ半島の突端に位置する女神ヘラ・アクライアの聖域ヘライオン Heraion of Perachora 遺跡を訪れた(6)。今回の予定にはなかったが、ギリシアの巡礼地調査という私の研究課題を古山氏が配慮して急遽計画に入れてもらった所である。レンタカー利用のメリットで、臨機応変の対応ができた。ここにはヘラ神殿のほか、恐らく対岸から船で訪れた巡礼者が下船したあと神殿に向う途中にあるＬ字型のストア、祭壇、かなりの規模の貯水のための水槽、水道溝、食堂、第２神殿などの遺構が狭いスペースに立ち並んでいる。またこの遺跡は中期ヘラディック期からミュケナイ時代、幾何学様式時代、アーケイック期、古典期、さらにローマ時代まで聖域として多くの人々が訪れた場所で、コリント、アルゴス、メガラなどが入れ替わりながら支配していた。このようにかなり長期にわたって聖域として重要な場所であったが、ここでの出土品の多くはアテネ国立考古学博物館に保管されている。



(6) ヘライオン

(7) ディオルゴス

(8) 浸食される石畳（ディオルゴス）

次に訪れたのは、古代ディオルゴス遺跡である。ここにはコリント地峡を陸路で船を運んだ石畳の道が残っている(7)。ペロポネソス半島の入口に位置し、サロニカ湾とコリント湾に挟まれたコリント地峡は19世紀末に運河（全長60,343m、幅23m）が開削されるが、その構想はすでに古代からあったものの実現しなかった。そのため地峡部分では船を陸路で運んだが、轍の跡も残る石畳の保存は決してよくない。現在侵蝕により石畳の一部は崩れて水没し、このままでは消滅の危機にあり、早急に手を打たなければならないと痛感した(8)。

当初予定していなかったが、今回古代ギリシア四大民族祭典（オリンピア、ピュティア、イストミア、ネメア祭）の遺跡を全て見ることができた。最初に訪れたイストミア遺跡は残念ながら閉鎖中で、ポセイドンの聖域及び競技施設はフェンスの外から垣間見ることしかできなかった。そして古代コリントの港として交易で重要な役割を演じたケンクレイアは、新約聖書「コリント人への手紙」のパウロがコリントでの布教の後、シリアに向け乗船しようとした港であるが、現在は水没した部分もあり、倉庫と港の一部が見られるに過ぎず、昔の栄華を偲ぶことはできない。

さらに海岸沿いに１時間ほど車を走らせ、海岸沿いの村で1972年から発掘が行なわれている旧エピダウロスの遺跡（聖域のエピダウロスとは別）に到着した頃はすでに夕暮れであった。紀元前４世紀後半の劇場や

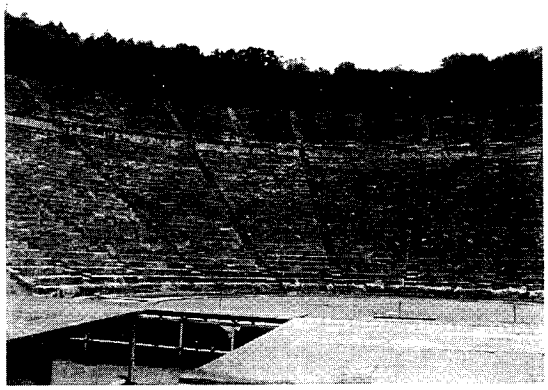
幾つかの建物などの痕跡を確認して本日の日程を終え、ナフプリオンに到着した頃にはとっぷり日も暮れていた。

第4日目

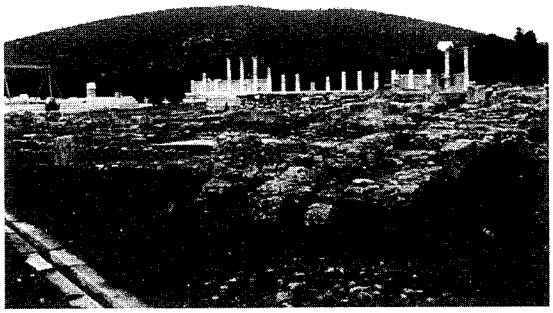
8日は、ナフプリオンから逆戻りする形でキュノルティオン山麓に広がる聖域エピダウロス遺跡に向った。医神アスクレピオス信仰の中心地で、紀元前4世紀から3世紀にかけてギリシア内外からアスクレピオスによる病の治癒を求めて多くの巡礼者が訪れた広大な聖域には、巡礼者の治療と精神的リフレッシュをはかる数多くの建物が立ち並び、最盛期の繁栄ぶりが窺われる。朝早いこともあり、最初に訪れた博物館は、9時前に入ったのは我々だけ、野外劇場も我々だけ、遺跡にも遺跡復元の関係者以外に殆ど人影はなく、寂しいほどだった。そのおかげで博物館では治療碑文や奉納板、彫像、トロスの装飾品や遺構、手術器具などゆっくり写真を撮ることができた。遺跡巡りは聖域の一番奥の、その音響効果のすばらしさとほぼ完全な形で残っている12000人が収容できたといわれている野外劇場から始めた(9)。カタゴゲイン（宿泊施設）、ギリシア時代の公共浴場、ギュムナジオン、オデオン、スタディオン、コテュスのストア、ローマ時代の公共浴場、北の柱廊玄関、聖域の玄関（プロピュライア）、アスクレピオス神殿、アバトン、トロスの順番で邪魔されることなく、ゆっくりと回ることができた(10)。

ティリンスを経由して、四大民族祭典遺跡の2番目として、また現在は良質なワインの産地として有名なネメアの古代遺跡を訪れた。入場してまず右手の博物館に入る。種々の陶器製容器や献納板、貴金属の装身具などの出土品がわかりやすく展示されている。実際の遺跡は紀元前4世紀に建てられ、現在は柱の復元が行なわれているゼウス神殿(11)を中心に、宿泊施設やローマ時代の公共浴場跡の発掘などが行なわれている。大蛇に殺された幼児オペルテースを悼んでテーバイに向かう七将が始めたとされるネメア祭が行なわれたそのスタディオンはトンネルによって繋がっている。スタディオンは1970年代からカリフォルニア大学バークレー校によって体系的な発掘調査が行なわれ(12)、トンネル内の落書きなど貴重な発見が行なわれた。

次に古代コリント遺跡を訪れた。ここでも数人の観光客がいるだけで、周辺のお土産屋も店を閉めている所が結構あり、おまけに今回はレカイオン通りや北バシリカ、ピレーネの泉の地区は工事のため立ち入り禁止で、ローマ時代の古代劇場、オデオンのある入口から入場し、グラウケの泉を見



(9) 野外大劇場



(10) 右：アバトン遺跡と左：復元工事中のトロス

(11) 復元工事中のゼウス神殿

(12) スタディオン

て、考古学博物館に入った。今回は残念ながらコリントのアスクレピエイオンから出土した奉納板や手形・足形などの奉納品等が陳列されている部屋は閉鎖されていたが、新石器時代からローマ時代までの出土品、モザイク画、壷のコレクション、アウグストゥスらの彫像、石製の手術台や金属製の医療器具などは写真に撮ることができた。遺跡(13)はお決まりのコースになるが、アポロン神殿、アゴラの商店跡、南のストア、聖パウロが説教をしたベーマ、博物館近辺の神殿跡などを見学し、次いでアクロコリントの途中まで車で登った。ここにはビザンツ時代の要塞跡などあるが、午後3時で閉鎖され、内に入ることはできなかった。そのあとはひたすら車をコリント湾沿いに走らせ、オリンピアに到着したのは午後7時半過ぎで、それからホテル探しを始めたが、シーズンオフでクローズしているホテルも多く、やっとのことでホテル・ヘラクレスにチェックインした。

(13) コリント遺跡：アポロン神殿を臨む

(14) 火災によって伐採された樹木

第5日目

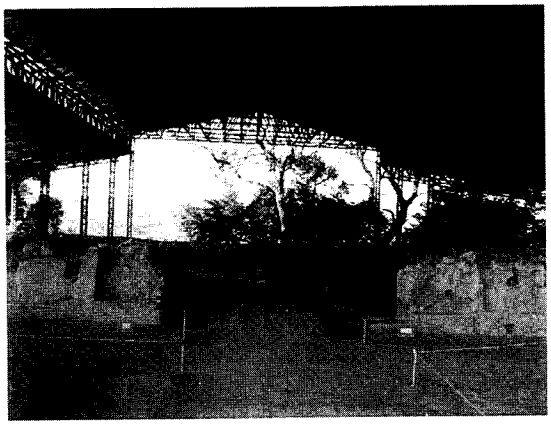
9日は午前中をオリンピアの考古学博物館と遺跡調査に費やした。昨年夏、山火事で遺跡のすぐそばまで火が接近したことを新聞で知っていたが、実際行ってみて、丁度焼けた木の伐採が行なわれ、山は丸坊主のところもあり、その凄まじさを実感した(14)。オリンピアの発掘は19世紀からドイツ考古学界によって行なわれたが、その出土品は考古学博物館に収蔵され、公開されている。ギリシアで最も有名な民族祭典であるオリンピア競技会は紀元前776年に開始され、ゼウスへの奉納競技会として、ローマ皇帝テオドシウスの異教祭礼禁止令が出るまで1200年間にわたって挙行された重要な宗教祭典で、競技開催時には休戦の布告が出され、ギリシア各地からポリスの栄誉を担ったアスリートたちが集い、持てる技をゼウスに奉納するという神聖な競技会であった。その後426年に布告された神殿破壊令や6世紀に起きた大地震で聖域は埋もれてしまったが、1875年からの発掘によって往時の姿を復元している。

(15) ゼウス神殿の列柱

クラデオス河畔に広がるゼウスの聖域に入ると、左手にローマ時代の浴場、プリュタネイオンが、右手にギュムナジオン、パラエストラの列柱に囲まれた遺構が現れる。さらに進むとテオコレイオン（神官団宿舎）、レオニデイオン（宿舎施設）の基礎が広がる。左手に折れると、南の浴場、ブーレウテリオン、ネロの家の遺構が並び、反対側にはゼウス神殿の基台が偉容を誇るが、その列柱は同方向に輪切り状態で倒れている(15)。反響列柱廊の先にはアーチ状のゲートがあり、それを潜ると4万人以上を収容したといわれるスタディオン内に入る。スタートラインからゴールラインまでのコースは約192mで、これが1スタディオンとなった。ゲートを出ると右手に宝物庫とヘロデス・アッティコスの泉屋（ニュンファイオン）が並ぶが、その前に競技で不正を働いた選手たちの像(ザネス像)が並んでいたという台座が続く。メトローン、ゼウスの大祭壇の先に紀元前7世紀に建造された最古のヘラ神殿がある。さらに五角形のペロピオン、マケドニア王

フィリッポス２世が奉納した円形のフィリペイオンなどが立ち並ぶ緑豊かな遺跡である。

午後はさらに車を南下させ、ミュケナイ時代のピュロス王国の王ネストールの居城遺跡とコーラ（ピュロス）博物館を訪れたが、ここも我々だけ、他は監視員がずっと付いてくるだけで、十分に遺跡を堪能し、たくさんの写真を撮ることができた。ネストールの王宮は1939年アメリカ人考古学者のC.ブレーゲンによって発掘され、メガロンと多くの貯蔵庫をもつ遺構が明らかにされた(16)。また試掘の最初の鍬が王宮の文書庫に入るという幸運により大量の線文字Ｂ粘土版文書が発見され、ミュケナイ時代の文字である線文字Ｂを解読するきっかけを作った。またコーラ博物館にはピュロス出土の斬新なデザインの壷や青銅製の武器、黄金製の装身具やカップ、テラコッタ製の土偶や献納台などが陳列され、充実した展示となっている。帰途、ピュロス王国の国境であるとされるネダ川で車を停め、夕日に光る川面を眺め、古えに思いを馳せた。この夜はギリシア第３の都市パトラのホテルに宿泊した。



(16) ピュロス王宮メガロン

第６日目

10日は、以前はリオからフェリーで対岸に渡ったが、現在はリオ＝アンティリオ大橋が架かり、車で渡ることができた。ナウパクトス、ギャラクシディ経由で、オリーブの樹海を通りパルナッソス山の中腹に位置するデルフィへ車を走らせる。デルフィは古来アポロンの聖域があり、神託で有名であるが、アポロンに捧げられた民族祭典の１つピュティア祭が４年に１度開催された。またここは「世界の中心（へそ）」とも言われていた。

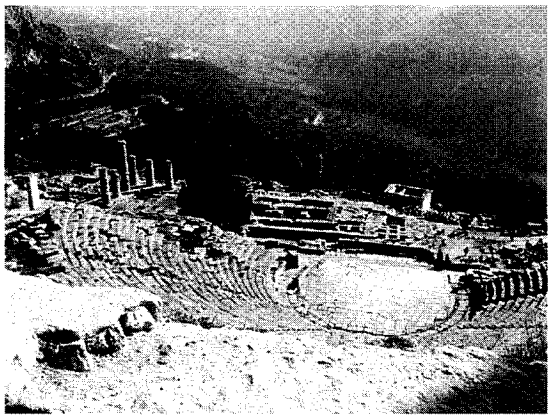
この地はミュケナイ時代から聖なる場所であったが、大地の女神ガイアとその娘テミスに取って代わって予言の神アポロンがこの地を支配するが、巫女（ピュティア）を通してアポロンの神託が下され、その評判でギリシア内外から多くの嘆願者が神託を求めて訪れ、古代ギリシアの情報収集・発信センターとなった。ここもローマ皇帝テオドシウスによる異教祭礼禁止令によって閉鎖され、その後忘れ去られたが、1829年からフランスの考古学界によって発掘が行なわれ、その遺構が明らかとなった。

近代的な建物のデルフィ博物館の所蔵品を写真に収めた後、遺跡に赴く。葛折りの参道を登りながら進むとアポロン神殿に辿り着くが、そこまでの仕掛けが巧みである。ローマ時代のアゴラを通り過ぎると城壁に囲まれた神域に入る。両側には各都市から奉納された宝物庫や記念碑、奉納群像が立ち並び、如何にデルフィの神託が多くのポリスから絶大な信頼を得ているのかを誇示する。嘆願者はそれらを眺めながら神託に期待を膨らますのであろう。参道が大きく曲がるところにオンファロス（へそ石）があり、その先にギリシア第１のポリスであった「アテナイ人の宝庫」が復元されて建っている。ガイアとテミスの神域、ブーレウテリオン、シュビラの岩、ナクソスのスフィンクスが円柱の上に聳え立っていた台座、アテナイ人のストア、コリント人の宝庫と続き、左に折れ坂道を上るとアポロン神殿に近づく(17)。神殿の地下のアデュトンで巫女によって下された託宣を神官が韻文に書き改め、嘆願者に伝えたと言われている。さらに坂を登ると約5000人を収容した野外劇場(18)があり、ピュティア祭で音楽や演劇のコンテストが行なわれた。そして曲がりくねった坂道を最上部まで登ると、ピュティア競技が行なわれた約

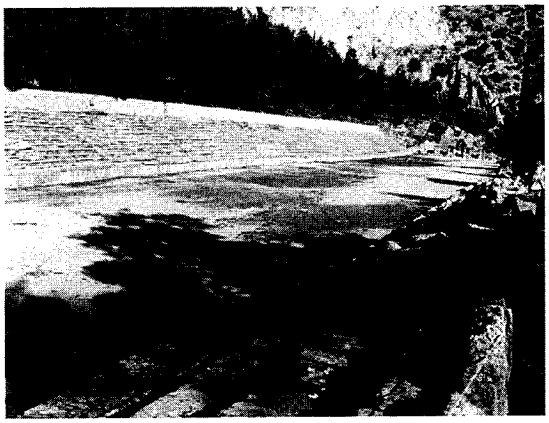
(17) アポロン神殿

7000人が収容の馬蹄形のスタディオンに辿り着く(19)。

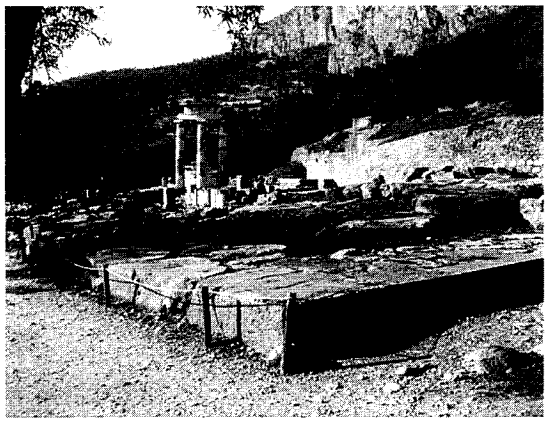
神域から出て少し下ったところにカスタリアの泉がある。ここで神託を伺う嘆願者はまず身を清めたと言われている。さらに先に進むとギュムナジオンとアテナ・プロナイアの神域が広がっている(20)。観光シーズンオフのデルフィでも、以前の何十分の一の観光客しかおらず、思う存分遺跡を堪能した。その後、アラホバ村を通り、リヴァディアに行った。ここはギリシアでは珍しく水の豊かな所で、中世の城壁が聳える断崖絶壁の岩から清水が湧き出て、町の中を滝を作りながら流れ、マイナスイオンに溢れ、夏に来れば涼しく、改めてギリシアの多様な地形を実感した。そのあとは高速道路を通り、夕方ラッシュアワーのアテネに戻り、レンタカーも無事に返し、ギリシア国内の旅行は無事終了した。



(18) 野外劇場とアポロン神殿



(19) スタディオン



(20) アテナ・プロナイア

第７日目

最終日の11日は、朝８時にはホテルを出て、シンタグマ広場から歩いて貨幣博物館、アカデミア、アテネ大学、国立図書館を通り、オモニア広場へ。地下鉄の駅に発掘された遺物が展示されていると聞いたので、それを観ようと地下に降りたもののホームに入らなければ観られないので、再び地上に出てアテネ国立考古学博物館へ。約４時間ほど写真を撮りまくり、最後の壷絵の部屋では、デジカメのメモリーが僅かになり、とうとう撮影をあきらめた。そのあとアクロポリス方向に戻り方々、アティナス通りを通りながら、現代のアゴラ（中央市場）で八百屋、魚屋、肉屋などを回り、節約しながら写真を撮った。

このように短期間であったが、古山夕城氏の配慮で、古代ギリシア人の心性を考える上で重要な遺跡、遺物の資料収集を行ない、充実した巡礼遺跡現地調査を終えることができた。今後はこれらの資料の整理とエピダウロス以外の多様な古代ギリシアの巡礼活動について検討を行ないたい。重ねて古山夕城氏にお礼を申し上げ、調査報告を終えたい。

＊拙稿、「アテネ・アクロポリスとパルテノン」『愛媛大学法文学部多文化社会研究会第11回公開シンポジウム報告』2006年所収

参考文献

A Barber, *BLUE GUIDE GREECE THE MAINLAND*, Somerset Books, 2005[7].

周藤芳幸、澤田典子、『古代ギリシア遺跡事典』東京堂出版、2004年

J.M.Hurwit, THE ATHENIAN ACROPOLIS,Cambridge UP, 1999.

「地球の歩き方」編集室、『地球の歩き方　ギリシアとエーゲ海の島々＆キプロス '08 '09年版』ダイアモンド・ビッグ社、2007年